

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』第十五卷「人文科学（一の五）」

日本思想、日本の仏教、日本神話・神道および日本史、日本の地理（三）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十五巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、日本思想、日本の仏教、日本神話・神道および日本史、日本の地理、とりわけ日本固有の思想と文化に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳々十九歳

第二編 二十歳々二十九歳

第一部 日本人の時空観について

第二部 九鬼周造

第三部 (編集)

日本哲学、日本精神、日本文化と私

日本哲学、日本精神、日本文化と私

和歌

城郭

怒濤の日本庭園巡り

日本哲学、日本精神、日本文化觀察史

日本精神の定義

日本精神の定義

日本精神体现者

西田幾多郎

三島由紀夫、北一輝、石原莞爾

九鬼周造

岡倉天心

久松真一

川端康成

岡潔

井筒俊彦

和辻哲郎

南方熊楠

日本文化に表れた日本精神

四季

和歌の起源

和歌の理念

勅撰和歌集 天覧

「余情」「いき」「情緒」

能

日本刀

武士道

茶

花

民話

和服、着物

和食

- 日本家屋
神社仏閣
日本精神及び日本文化の根幹としての日本語
日本人男性の実存と漢学、男手としての真名
日本人女性の実存と和学、女手としての仮名
日本語の構造
現代日本の悪習と日本精神の形骸化
中元と歳暮
年賀状
頭語と結語、時候の挨拶
- 第三編 三十歳〜三十九歳
- 第一部 松原寛哲学の真髓 ・日本大学藝術学部に築かれた「聖なる総合文化」としての「日芸」・
- 第一章 序 「日芸」・「芸大」の語をめぐるもどかしさ
- 第二章 日大藝術学部・松原寛の芸術系私立学校大統一計画
- 第三章 「日本」、「ニッポン」、「ジャパン」が叫ばれる時代
- 第四章 日本大学が名乗る国号、掲げる日本精神
- 第五章 松原寛の生涯の三分
- 第六章 松原寛少年・青年の苦悶 ―「信仰」と「権勢欲」の葛藤から「宗教」と「哲学」の葛藤へ―
- 第七章 松原少年・青年への共感、憧憬、敬意
- 第八章 「松原寛哲学」の構築と展開へ
- 第九章 「宗教自体」の代替能力を持つ哲学を求めて
- 第十章 「破産した哲学」の避難所としての芸術、「総合文化」としての宗教
- 第十一章 「終章、即、序章」の哲学パズルとしての松原寛哲学の通時的円環性
- 第十二章 松原寛哲学における芸術および芸術教育の立場―必須の円環と惰性―
- 第十三章 松原寛哲学の先見性
- 第十四章 松原寛の「キルケゴール的日本人」としての私生活
- 第十五章 ヒューマンスティックな芸術教育
- 第十六章 天理教入信
- 第十七章 日大が掲げる日本精神への回帰へ
- 第十八章 結 松原寛と私
- 注
- 引用・参考文献
- 第二部 日本大学芸術学部図書館刊行誌に執筆
- 第四編 四十歳〜四十九歳
- 第五編 五十歳〜五十九歳
- 第六編 六十歳〜六十九歳
- 第七編 七十歳以降
- 第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
- 第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

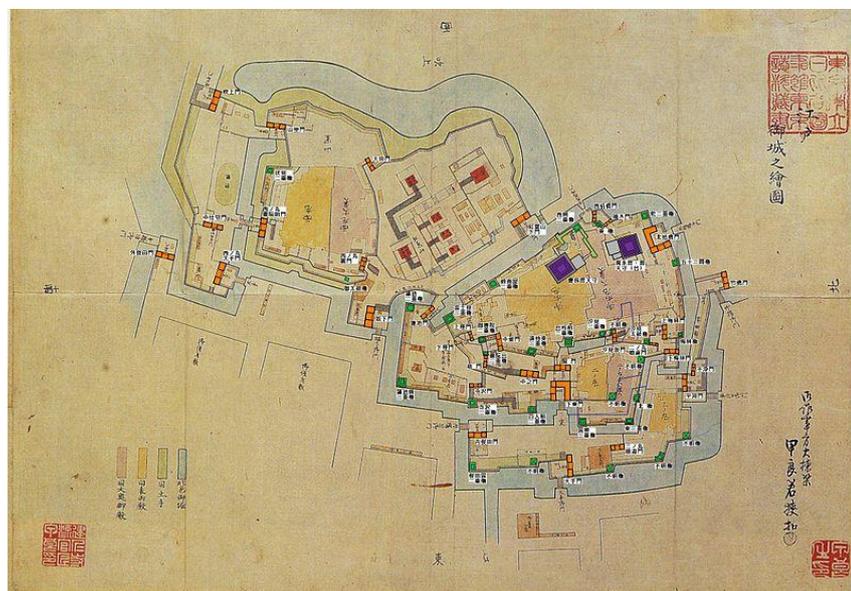
第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 日本人の時空観について

二〇一〇年十二月六日 起筆、攔筆、公開

今回は、「日本人の時空観」がどのようなものであるか、特に、西洋文明や中華文明と比べて近代化以前の日本文化がいかなる時空観の特徴を示していたかについて、僕がいつも今の日本の街を歩いていて考えていることを書いてみたい。

今日は、これを建築の視点で考えてみたい。ここでは、あえて「西洋白人・中国人（漢民族）」（一神教的・中華思想的・ユーラシア大陸的な時空観）と「日本人・中国国内の先住民」（アニミズム的・多神教的な時空観）という構図で見えてみたい。



突然だが、右図は江戸城の区画、下記のリンクはその間取りのデータベースである。

一見して気づくのは、近代化以前の日本人の間取り方（間取り）は、自然風景をそのまま利用して、極めて感覚的・即物的に区画や畳をつぎ足していくだけで、上空（超越的視点）から全体を俯瞰・

鳥瞰して見るような抽象性を持たないことである。

あるいは、日本人には、数学的に厳密な「対称性（シンメトリー）」を「美」と見るような視点がほとんどなかったと思われる。ここで言う「対称性」とは、むしろ「変換（transformation）」に対して不変であるあらゆる性質」のことであって、決して美術技法的・造形的な意味とは限らない。つまりは、「思想」の問題でもある。

■ 画像出典

<http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/top>

例えば、「長方形の建物を建てたい」などと一瞬は思ったとしても、西側だけに山や海があれば、山や海を崩したり埋め立てたりすることを簡単には行わず、山や海の形状に従った都市計画を採用し、「長方形」といった数学的理念のほうを簡単にあきらめてしまう。平城京や福原京の方角や構造のいびつさも、これを物語っている。

しかも、部屋と部屋の区切り方を見ても、「パブリック（公）」な性質と「プライベート（私）」な性質との厳格な区別がなく、御簾（みす）を垂らしたり屏風を立てたり襖（ふすま）を設けたりするだけで、一撃で穴が開くような間仕切りしか設置しておらず、例えば、恋愛模様にしても、隣部屋の異性にちよっかいを出すかどうかの判断は、もっぱら本人たちの主観的媚態（九鬼周造の言うところの「可能的関係」）に従っている。

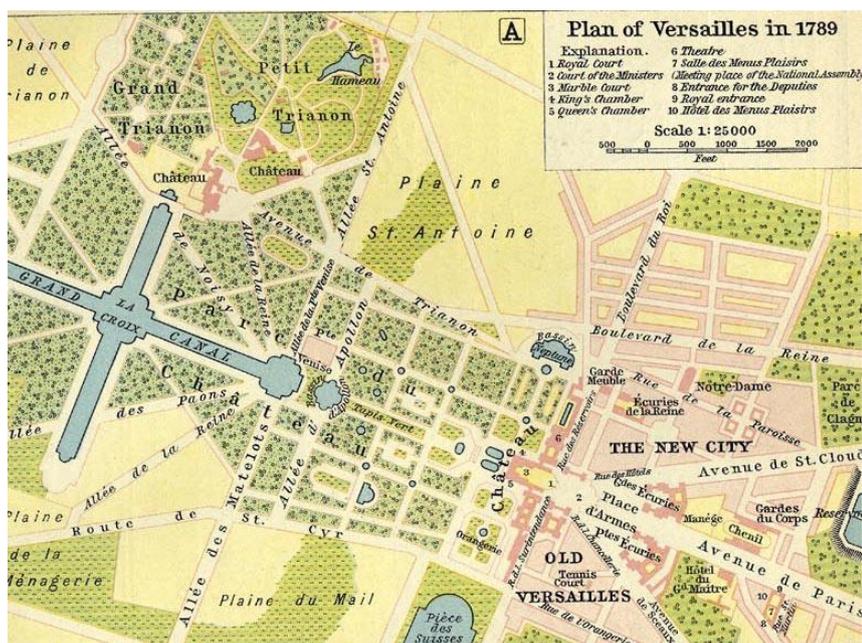
いわゆる「床の間」も、壁の中央に配置されず、必ず押し入れなどの世俗的・日常的な空間とセットで左右非対称に配置される。

このような時空観は、建築物のみならず庭園にも表れており、例えば、庭園内のいかなる場所にも特異点を持たず、園内の歩行の際にもまるで霞がかかったかのように前が見えない造りとなっている桂離宮にも、その時空観が表れている。

その意味では、かなり幾何学的に整備され、朱雀大路（すざくおおじ）を中央に通した平安京などは、律令制の輸入と共に、明らかに渡来した漢民族や朝鮮民族の手が入ったことを示すもので、縄文の竪穴住居や、室町の書院造りや、江戸の武家屋敷や、明治・昭和の日本家屋に比べれば「日本的ではない」かもしれない。

それでも、日本的な時空間の取り方が失われているわけではなく、唐の長安城の超越理念的・中華思想的な計画性に比べれば、やはり日本の味わいがする。

一方で、右図はヴェルサイユ宮殿とその敷地の俯瞰図である（以下のリンク先より引用）。極めて数学的に計画された様子が見て取れる。西洋建築の根底にあるのは、「我々の世界には、全体を俯瞰する超越的特異点が実在する」という考え方であって、それは結局のところ、キリスト教の神の実在性（への疑いなき信心）によって保証



されている。漢民族や朝鮮民族にも儒学の一部に一神教的な思想・宗派があるが、それでも必ず陽明学や道教やアニミズムなどの自然信仰を対置して自己確認を取るのであって、西洋キリスト教文明のように圧倒的な超越理念から世界を俯瞰する時空観は持たない。

■ 画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Map_of_Versailles_in_1789_by_William_R_Shepherd_\(died_1934\).jpg](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Map_of_Versailles_in_1789_by_William_R_Shepherd_(died_1934).jpg)

日本の建築は、一見する限りでは「半ば対称的」なものもあるにせよ、その筆頭と思われる平等院鳳凰堂でさえ、細部を見ると「線対称になっていない」点は、人体に似ている。人体は、外見上は「半ば対称的」ではあるが、内臓の配置は「非線対称」である。

これだけ解剖技術が発達し、人体の非対称性を目撃しながら、「人体の実際」と「その人体の暮らす建築の実際」とがピタリと合っていないのが現代のほうであることは間違いないようである。和洋折衷ながら伝統性を保った建造物である東京駅舎の周辺に立ち並ぶ、数学的な建造物としてのオフィスビルは、現代日本人の時空観の変化を象徴しているのかもしれない。

西洋建築にとつては、人間が生きるこの時空間内の点の座標(x,y,z)は、常に一神教的な超越理念(原点)からの距離として測られるも

のであって、その象徴がヴェルサイユ宮殿における国王の視線であるのだろう。何も建築のみならず、西洋絵画の一点透視図法などの遠近法も、西洋人にとってその上達は、ほとんど神への信心深さと並行して捉えられたのではなからうか。

僕は作曲もやっているが、西洋の音楽理論とは、常に神の目やにするものであって、「ド以外の音」に対する「ドの音」の優越性というものが和声学の基本思想となっており、一神教的超越理念への絶対的肯定を、この旋律の終止としての「ド」、あるいは和音の「トニック」終止としての「ドミソ」に象徴させなければならない。

琴や三味線の曲は、そういった一神教的な絶対時空観を壊すことでしか書けない体系を有している。西洋音楽理論をきちんとやった上で、それを日本の実存において打破し、日本の時空観を描くというのを、僕は自分の作曲における目標にしているくらいである。

もつとも、日常の僕の実際の身体が「感覚的（共感覚的）・即物的な時空観」を有している自覚があるからと言っても、この文章を書いている僕の視点は、「自己と世界の全体を俯瞰する、観念的・抽象的でメタな視点」である。

すなわち、現代人であるということ、また現代人が「語る」ということは、どの宗教圏に属しているようとも、多かれ少なかれ、自己と世界に対して俯瞰的である。一方で、例えばアイヌ民族などの少数民族は、「感覚的な自己の身体」を俯瞰的に「語る」ということはしなかつただろう。

現代において何かを「語る」ためには、一度は自己意識がメタ視

点に登って世界を見下ろすことが必要であり、それは禅的な「世界との一心同体化」とは対極にあると言える。

ただし、その「ヴェルサイユ宮殿」なメタな視点を持ちながらも、同時に「日本家屋的」な視点を自分の身体・自己から失わないように生きることが、日本人の（少なくとも私が考える私の）今後の課題だと思っている。

今でも日本人の潜在的な身体感覚は、「ヴェルサイユ宮殿的」ではなく「日本家屋的」であると信じてみたいと思う。

第二部 九鬼周造

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作

『「いき」の構造』 『偶然性の問題』 『人間と実存』

拙著『音に色が見える世界』中の「にほひ」論における日本の情緒の正三角形の着想は、九鬼周造の「いき」論における日本の情緒の六面体の着想に似ていると思う。

私は同拙著で、古語の「にほひ」が指していた日本の情緒を、「現代日本語の“におい”のみならず現代日本語の“いろ”や“おと”などを内包しつつ裏に異性を志向する一種の共感覚である」という

旨の主張をおこなった。私の心の奥底に、九鬼哲学へのオマージュの意識があつたのかもしれない。

九鬼哲学は、何をどう読んでも、必ず「異性論」であるとしか思えない。キルケゴールの『誘惑者の日記』的でさえある。クリスチャンでありながら、ことあるごとに日本回帰しようとする自らの身体と精神との一つの説明法が、「いき」であるのだろう。

最後は祇園の芸妓とともに一生を終えた九鬼周造から見れば、私の私生活はおそらく、極めて硬派すぎてつまらないだろうが、逆に言えば、そこが九鬼周造の「良き不真面目さ」、そして、九鬼哲学（私が「クリスチャン的やまと回帰哲学」と呼ぶもの）の「良き不徹底さ」でもあるのだと思う。しかし、そのような九鬼周造の行動も、元を辿れば、自分が（母波津子の不倫相手である）岡倉天心の子ではないかと苦悩した日々に行き着くことができるのだろう。ちなみに、やまと回帰論を展開する日本のクリスチャンの中で、最近読んだのは、阿部仲麻呂氏というカトリックの神学者の『信仰の美学』で、これは「日本的霊性の神学」の構築を試みていて、非常に面白い。

第三部

編纂中。収録を待たれよ。

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 松原寛哲学の真髄・日本大学芸術学部に築かれた「聖なる総合文化」としての「日芸」・

二〇一五年十一月十二日 起筆

二〇一六年四月十五日 攔筆

二〇一六年七月七日 刊行

著作権の一部を譲渡し、外部刊行者が刊行済み。「日芸ライブラリ」日本大学芸術学部図書館活動誌 No.3 の「特集 日本大学芸術学部創設者 松原寛 日芸魂の源流」（日本大学芸術学部図書館、二〇一六年）を見よ。または、在庫があるため、入手希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。大学も無料配布している。規定外の利用にあたっては、著作者及び著作権者に問い合わせよ。

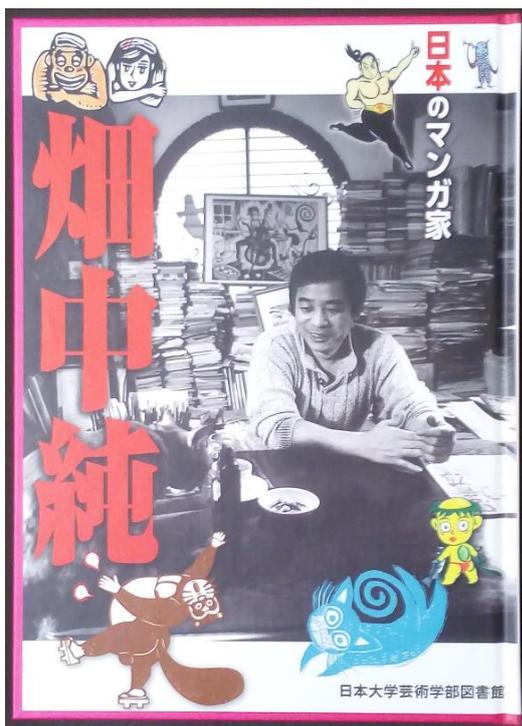
第二部 日本大学芸術学部図書館刊行誌に執筆

二〇一六年十一月二十一日 起筆、攔筆、公開

あまりの多忙ぶりに自ら辞易する日々でしたが、半年間何とか過

ごして参りました。ブログの更新が不定期になり、申し訳ないです。報告が遅れましたが、下記の日本大学芸術学部図書館刊行誌に執筆しております。まだ手元に余っていますので、欲しい方はご連絡下さい。

●ユートピアとアンチユートピアの融合を目指して、畑中純の描いたアンチユートピア「九鬼谷温泉郷」から現代を眺める、
（「日本のマンガ家 畑中純」、日本大学芸術学部図書館、二〇一六年）



●松原寛哲学の真髄、日本大学芸術学部で築かれた「聖なる総合文化」としての「日芸」

（「日芸ライブラリー 日本大学芸術学部図書館活動誌 No.3」内「特集 日本大学芸術学部創設者 松原寛 日芸魂の源流」、日本大学芸術学部図書館、二〇一六年）

